

6章 青年期と身体

本山俊一郎
岡崎 祐士

はじめに

青年期は再び自己とまた他者と出会う時期である。発達の視点からは、一般に知られるように、生後6カ月以降になって乳児は鏡の中の自分の姿を自分と認めることによって、視覚的に自分の身体をとらえることができるようになる。ワロン Wallon, H.¹¹⁾は、乳幼児期においては運動感覚的印象と視覚的印象との間に解離の傾向があるため、自分の鏡像的身体像を自分だと認めることに困難を伴うと述べている。さらに、人が鏡に映し出される身体の中に自分の身体を認めるようになるのは、少なくとも他者と自己との混淆、次に他者への同化を経て、次第に他者から自己を分化してきたことによると記載している。このように自己の身体は他者との関係を通して認知されていくという発達過程を辿ることが示唆される。大脳皮質の発達とともに、幼児期を過ぎる頃に心身は一旦まとまりをみせる。それと重なる潜伏期（5歳から前思春期までの小児の性欲が表面化しない時期）を経て、10～12歳を過ぎる頃から身体と脳における生理的・生物学的・解剖学的な変化が生じる。それまで具体的にしか思考することができなかった子どもたちが、この年齢を境に形式的・観念的思考・自己を対象化する思考が可能になる。これらを主に保証するのは、思春期前後に急速に発達し、左右大脳半球の統合を遂げつつある脳の、とくに前頭連合野の発達と関連すると想定されている（久保田⁶⁾）。この時期には、小児期の特徴を残しながらも脳波もほぼ成人のパターンに近くなり、ホルモンの分泌を調節する中枢である脳下垂体も成長し、生殖が可能となる。生殖能力の獲得と共に性欲も自覚され、異性を主とする好ましい他者への関心が芽生える。このような生物学的変化が自己像の身体的基盤となる。このように、青年期には脳が統

合へ向かうが完成した段階ではない。つまり新しく発達した脳機能も既に働いてきた脳機能をすべて包みこんで統合できない。それに対応して心理的には発達する力とそれに拮抗する力の力動的相互作用が生じるので、身体像が揺らいでくる。自己像にも変化が生じる。今までの対象世界に関連している自我親和的な身体と、新しい対象世界に関連し変化しつつある身体との間に再び解離が生じることがある。青年期の身体像はこのような矛盾をはらみつつ変化を遂げる時期のそれである。このような視点を踏まえた上で、本稿では青年期の身体について概観した後に、青年期における最近の病態の特徴、特に身体の問題について、筆者らの経験した症例をもとに考察を行いたい。

1 節 青年期における身体とは

(1) 青年期と現代社会

かつては身体的な成熟は家庭内労働力の充実につながり、そのことが社会的に認められる大きな要因となっていた。現在でも肉体労働が大きく評価される第一次産業地域では、成人期への移行はより早期になされる。しかし第三次産業の比重が大きい都市部では、成人として認められる年齢の上昇と、加速現象の結果としての身体的成熟の低年齢化は、青年期を拡大させているといわれている。笠原⁵⁾は、精神医学の臨床的知見から、青年期は10歳から30歳前後の20年間くらいをとるべきだと主張している。そして、そうすることが今日妥当だと考える理由として、青年期に発症する精神障害にはかなりの部分が30歳前後になると軽快ないし治癒するということを述べ、22, 3歳から30歳前後までをプレ成人期としている。このような青年期の延長に加え、今日的な社会変化は青年期をより複雑なものとした。たとえば進学競争の激化に伴い、仲間関係が希薄化していることや、少子化現象によって親の期待を一身に引き受け自己を確立することが困難であること、そして性的抑制が解放されたことにより抑圧が弱体化し、かわりに分裂や否認の機制が優位となったこと(註)などがあげられる。これらのことによって、それまで比較的容易であった人生の目標の設定が困難になり、いわゆる同一性の混乱が問題化した。

註) 抑圧とは、内的な情動や欲動を意識から排除する自我の働きで、否認とは

現実に対する知覚が意識に与えられているのに、他方でその知覚を否認する働きである。この現実を知覚している自我と、その知覚を否認している自我が併存する状態を自我分裂 (ego splitting) という。

(2) 同一性とその基礎としての身体像

同一性 (アイデンティティー) について記述し、青年期研究を推進したのはエリクソン Erikson, E. H. である。エリクソンはライフサイクルにおける自我発達の危機という視点から青年期を見た。鑑¹⁰⁾はエリクソンのいう同一性確立へのプロセスを、他人の影響から少しずつ離れ、自分が自分の主人公になっていくことと述べ、アイデンティティーには (1) 幼児期から今日までの歴史とこれからの自分についての展望をもった自分のルーツに関係したもの、(2) 自分の仲間関係における自分の位置づけ、(3) 自分と社会との関係のなかでの自分の位置づけの3つの意味が含まれると説明している。そしてこの時期が危機的な様相 (アイデンティティーの拡散) を帯びやすいのは、自我が自分の身体や精神について、および他者との関係における自分の位置について、その関係を明確にすることを迫られることからくるといえる。このような青年期危機は、10歳前後に見られるようになる自我意識の出現と密接に関連してくるのだが、逆にこのときをもって青年期の始まりとされる。自我意識の発達の起源について、エレンベルガー Ellenberger, H. S.²⁾ はボールドウィン Baldwin, J. M. の説を引用し、「生後6カ月を過ぎると、私自身についての私の感覚は、相手を模倣することで育まれ、相手についての私の感覚は、私自身についての私の感覚によって育まれる」と自我と他者とが一緒に生成することによって自己が発達すると述べている。このように他者との関係のなかで生成してくる自我意識は、その青年期における特徴として、自分の中にもう一人の自己が生まれでて、その自己と自己との関係が基盤となって、他者からどう思われているのだろうかという他人の中にある自己の発見をもたらす。たとえば青年が、鏡を通して自分の顔や身体や服装を気にする態度には、他者に映った自己の身体を確認するというこの時期特有の意味がある。この場合自分が知覚している自己が現実の自己を正しく反映しているとは限らない。自身によって感じとられ、知覚された自己の姿は自己像と呼ばれる。自己像は、思考・感

情・行動を規制し、青年の自己のあり方に影響を及ぼす。そして自己像の基礎となるのが自分の身体に対する意識、すなわち身体像である。「ボディ・イメージ」を著したゴーマン Gorman, W.⁴⁾ は身体像について、「身体のイメージとは自分自身の身体についての概念である。それは知覚的プール（註；知覚されたものの集積）と経験的プール（註；経験されたものの集積）との相互作用によって形成される。知覚的プールは、我々の現在および過去のすべての感覚的体験から構成され、経験的プールは我々のすべての経験や情動および記憶から構成される。従ってボディ・イメージは、可塑的で力動的な総体であり、新しい知覚や新しい経験によって絶えず改変されている」と定義している。さらに身体像と自我の関係について、「自我の成長が、力動的なボディ・イメージの成長と連結しており、自我は個人の適応と生存のための機能を司るパーソナリティの構造である。自我とそのパーソナリティが時間的に徐々に進行しかつ形成されるように、ボディ・イメージも形成される」と述べている。身体像が自己—身体の背後にあって、どのように関連してくるのかについては、項を改めて具体的な症例を通して検討したい。

(3) 身体と自己および世界との関係

これまで述べてきたことをもとに、青年期の身体を自己および世界（他者）との関係からとらえてみる。身体の喜びが自己の喜びであり、身体の苦痛が自己の苦痛であるとき、自己と身体は一体のものである。自己は身体の実感を通して確認されるし、身体は自己として実感される。しかし身体が自己から遊離して対象化したとき、われわれの日常性の中では問題とされない「自己＝身体」という事態が揺らぐ。普段は無自覚にすぎている身体感覚は、五感の基底にあるものとして他者との共通感覚となり、自己と世界（他者）を結びつけている。これまでみてきたように、青年期において、自己はそれまでの「私」を意識することなく過ごしてきたいわゆる潜伏期とは異なり、「私とは何か」「自分とは何か」を問題にする。そこに至って世界（他者）は、家族の延長上にある集団であることをやめ、彼らに個としての役割（たとえば性役割同一性）や社会的存在を問う様々な可能性を秘めた世界へと変貌する。そこで自己と世界を結びつけるものが身体であり、逆に身体の変化を通してそのことに気づかさ

れもする。青年期においては自己と世界の関係が変容し、再び新たな関係が築かれることになるが、身体の変化はそれまでの自明な「自己＝身体」という関係を一旦崩す働きを担っている。そのうえで身体は再び自己と世界を橋渡しし、これまでとは異なった自己－身体の関係が形成される。つまり青年期の急激な変化の中で、身体に相応した自己の変容がおり、新たな自己－身体の関係の再編と確立がなされるのである。

2節 症例からみた「青年と身体」

(1) 自己と世界を分かち身体

〔症例1〕

初診時23才の女性である。彼女は高校1年より体臭と口臭を気にし始め、特に授業中やバスに乗ったときに迷惑をかけていると思うようになった。短大入学後一時軽快したが、職に就いてからは同様の悩みが強くなり、そのことが原因で転職を繰り返した。筆者らの精神科を受診した後も、身体の病気であるという確信は強く、口臭の原因を求めて歯科を受診したり、胃炎ではないかと疑い、内視鏡検査を受けたりしたが、異常がないと言われる度に落胆していた。彼女はそのために結婚もできないと強く思い、恋愛も避けていた。彼女には欠陥のある身体を変えたい、何とかそれから抜け出したいという変身願望があった。約2年ほどの面接治療の間に、この頑なな身体へのこだわりは、彼女の「生身」をさらけ出すこと、自然体でいることへの不安からもたらされるもので、生身を取り囲んでいる身体の欠陥ゆえに、こだわり続けねばならないと語られた。そして臭いを感じているときの身体の緊張は欠陥のある身体を補うものであると述べた。

この症例は、自分に何らかの身体的欠陥があり、周囲に不快を与えるとして自責的になる反面、周囲は積極的に自分のことを嫌っていると被害的に世界（他者）を意味づける側面をもつ。彼女にとって、臭いの病気は身体疾患以外のなにものでもなく、これさえ治れば対人的な問題も一挙に解決するものと信じていた。彼女は明らかに対人的状況に依存して症状が出現しているのにも関わらず、そのことを否定した。宮岡ら⁷⁾は中年期の自己臭妄想症と対比して、

次のようにこの青年期の病態に現れる特徴をとらえている。(1) 自己臭恐怖症状の背景として、青年群では対人関係あるいは社会への関わりが挙げられ、中年群では身体への関心が強い。(2) 青年群では周囲が積極的に自分を避け、時には軽蔑するなど周囲が悪意に近い意図を持っているように語られるのに対し、中年群ではやむを得ないものと考えていることが多い。(3) 青年群では臭いという身体の欠陥を人格そのものの否定につながると考えるが、中年群では臭いが人に迷惑をかけている以上の意味を持つことは少ない。本症例においては、宮岡らの指摘したように、身体の欠陥が心理面の欠陥、人格の問題、対人関係上の問題に密接に関連していた。このことは青年期における身体がいかにかと同一視されているのかを物語っている。さらにこの症例を五味淵³⁾の心身相関に関する論述を参照しながら、自我、身体、身体像に焦点をあててみよう。彼女の身体は客観的には臭わず、一方的に彼女が臭っていると思いきこんでいる。これは彼女が臭いを発する身体像をもっており、この身体像は彼女の臭わない客観的身体とはまったく相違している。このように客観的身体と身体像との関係にズレを生じ、自我はこの病的身体像と強く結びついていた。そして身体感覚において自我と身体の関係は分裂していた。依存心むき出しの生身の自己(内界)と世界(外界)を分かち彼女の身体は、病的な身体像と結びついた自我と分裂しているがゆえに脆弱化して、臭う身体として症状化していた。

次に、自己臭と同じく身体科を受診することが多く、しかも自己臭とは異なって他者の現前を前提とせず、自らの身体的異常を「自分でもわかる」と対鏡症状を媒介にしながら、自らの身体的欠陥を自己完結的にとらえている「醜形恐怖」を取り上げる。

〔症例2〕

初診時16才の男性である。中学2年の頃からクラスメートに顔のことを悪く言われ、さらに高校1年時には登下校のバスの中でも「顔がおかしい」とひそひそ話をされると感じるようになって精神科を受診した。彼は鏡を見る度に「鏡を見たらやっぱりダメ。ヒステリックになってしまう。自分で見てもおかしいと思う」と自分の顔が世にも希な醜い顔であるという確信を強めた。彼は「顔を変えたら性格が変わる。ある程度は自信がつく」と言い、形成外科での

手術に期待をかけ、治療者に紹介を懇願した。そして実際に形成外科を受診したものの、彼にとって満足のいくものとはならなかった。治療的には顔の悩みの背後にある幼児期の心的問題を残したまま、彼はその後環境を変える（学校を辞め就労した）ことで適応し一応の解決を見た。

この症例では自己の身体の一部が対象化され、しかも顔が集約された自己イメージとなっている。顔のことでかろうじて自己の統合ができているともいえる。意識的には、形成外科的手術によりすべてが解決するという幼児的な思考過程が働いていた。鍋田⁹⁾は醜形恐怖について、「第二次性徴における変化に伴い身体への戸惑いや恐れを抱く青年期において、醜形は同性との関係においてうちまかされていることを象徴的に表しており、そこには脱幼児化（分離個体化）と男性性の獲得という青年期の発達の課題が関連している」と述べている。鏡を通してみる自己の身体の変化は、心的には自他未分化な時代の自己イメージとは異なっており、彼は新たに開かれる世界及び他者を前にして、自己に起こる変化を否定し過去にしがみつこうとした。このことに関連し村上⁸⁾は、「未来への志向性を失った身体は、彼らの意識に重くまとわりつき、意識は現在へと閉塞される」と述べている。このように、青年期の身体の中に動き始める不穏な変化はかつての幼児的な自己の同一性を揺るがすが、「醜形」や「自己臭」などの自己の身体的特徴を嫌悪するという形で身体の一部に集約されることで、全面的な自己の解体を回避している。一般に青年期においては、自己の身体に対する違和感が生じるものであるが、より先鋭化したものが「醜形」や「自己臭」という病理性をもって表現されるのであろう。

(2) 自己と関わりをもつ身体

これまで見てきた「醜形」と「自己臭」が他人の目に触れる限りでの身体への嫌悪とすれば、それと対照的に「自分自身にとっての身体」への嫌悪という形で病態化したものが神経性食思不振症である。

〔症例3〕

初診時16才の女性である。高校1年の彼女はやせを心配されて母親と受診した。彼女はやせに対し「私はこの通り元気で、まったく不都合なことはない」と言った。小・中・高を通じて成績はトップを維持していた。性格は強迫的で

完全主義であった。彼女は学校の体育の授業がきつくてたまらないともらしながら、「でも休みきれない。走らなくっちゃ」と頑張り「一度休みをとると次も休みたくなるので、休まないで頑張らないといけない」と言いきった。また治療者に対し「人から頼られるのはいいが、自分から頼るのは人に取り入っているようで嫌だ」と依存に関する両価性を表現した。彼女の甘えをめぐる葛藤とそこから生じる不全感は、やせ、強迫、動くことで解消されていた。高校2年になり過食期を経験したが、現在は希望通りの大学に進学している。

彼女は「やせの鎧」の中に自己完結と安定を見いだしていた。しかしそれは真の安定ではなく、時に不機嫌で抑うつ的となった。彼女は食物がお腹に入ると停滞することを嫌った。食物の容器としての自己の身体を受け入れず嫌悪した。傍目には醜いと思われる「やせた身体」にはいっこうに頓着せず、たとえ骸骨のようにやせていても、自分の身体をまだ太っているとみなすところは、先ほど見てきた「醜形」や「自己臭」とは異なる。つまりあくまでも自分自身にとっての「身体へのこだわり」であると言える。このような自己の身体に唯一確かなものを求めようとする態度の奥に、まったく不確かな自己イメージと混乱した身体像がある。この症例において、彼女は頑張りやで負けず嫌いであり、それゆえ成績もトップを維持していたが、彼女自身治療者にもらしたように対人的には受け身的で非主体的に生きてきた。それだけに身体の変化に対抗し、何とかコントロールし、身体をこれまで通り自己の意のままにしようと戦い、そのことがやせを結果したと言えるだろう。おそらくここで注目すべきは、青年期において当然経験される身体の変化と、それからくるそれまでの自己との『ずれ』を『ずれ』として認知し受けとめていくだけの自己の確かさを持ち合わせていないということである。青年期における身体の変化は、それまでは問題なく自己に所属していた身体が、実は思い通りにならない『もの』として対象化してくることになり、自己が拘束される事態に直面するが、一方自由であることを願う自己との間に『ずれ』が生じる。そして、それまで潜在していた身体像の歪みが顕在化し、コントロールを失った身体を取り戻そうとする試みがやせを結果する。この意味で、やせは自己の内部に生じる『ずれ』を象徴的に橋渡ししている。

(3) 世界と関わりをもつ身体

次に身体感覚に障害があるとどうということが生じるのだろうか。離人症のケースを取りあげてみよう。

〔症例4〕

初診時16才の高校1年の女性である。彼女は現実感の喪失を訴えて不登校に至った。「自分の周囲のことに対して実感がわからない」と言い、授業中黒板の字が迫ってくるという知覚の変容感を訴えた。現実感が希薄なためクラスメートともうまくつき合えず、引きこもりがちとなった。

彼女は確かな自分というものを感ずることができず、そのため現在および将来の自己像があいまいであった。彼女の同一性確立への模索の苦しみは離人体験様の訴えとなって治療者に伝えられた。彼女の身体が世界を理解するのをやめたとき、学校の一員としてばかりでなく、家族の一員としての自己の存在も危うくなった。このような、「頭ではわかっている、身体でわからない」ことについて、尼ヶ崎¹⁾は木村敏氏の紹介した離人症のケース（「高い木を見てもちっとも高いと思わない。紙切れを見てもちっとも軽そうな感じがしない。色や形が目に入ってくるだけで、ある、という感じがしない」）を基に次のように述べている。「物を名指すことができ、それを既存の知識に結びつけることができ、正しい命題を作ることができる。しかし彼女の身体はそのものの『らしさ』を理解できない。そして自らの身体によって世界を理解するのをやめたとき、世界と自分の双方の現実感を失うのである」。さらに「音楽が音楽として、絵が絵として経験されるためには、私たち身体によって意味を受肉させられねばならない」と加える。つまりこの意味での身体は世界における自己の立場や地位や社会的状況を意味していると言える。だから身体感覚がないということは、特に青年期においては、自己の世界との関係において自己の位置を見失うことにつながる。

(4) 自己を内包する身体

ライフサイクルという視点に立てば青年期は社会と出会い、親の庇護から離れて自立して人生を歩まねばならない大きな課題を背負っている。真に自分にとって価値ある生き方を選択しなければならず、単に何かの職業に就けばよい

というものではない。これまでに見てきたケースの何れもがこの課題を背負っており、なかにはそれゆえに不適應をおこしているものもあった。言葉を変えれば、同一性の問題が不適應を招いていた。ここで言う同一性とは、幼少期より両親を初めとする重要な人たちとの同一化によって作られる様々な自己像を統合するものを指している。青年期に見られる病理は自らの同一性の問題としてもとらえなおされる。そこで同一性の問題が身体においても如実に現れているものとして多重人格を取りあげる。

〔症例5〕

初診時16才の女性である。6才の時両親が離婚し父親に引き取られ、小学2年の時父親は再婚した。中1の時盗癖、中2の時過呼吸が発現した。高1の2学期が始まってまもなく、「おうちがなくなったの」と子どもの人格で筆者らの精神科を受診、即日入院となった。しばらくは子ども人格が支配的であったが、入院10日目過呼吸発作を起こした後、16才の攻撃的な第2人格が出現した。その後人格の交代が続き、入院2カ月目に内省的な第3人格が出現した。その後二重身様現象を経て人格は統合された。

彼女は生来左利きで、小学1年の時右利きに矯正された。子ども人格は左利きであるのに対し、第3人格は右利きであった。子ども人格は服装も可愛らしく、態度は無防備で児戯的なところがあったのに対し、第3人格は周囲に敏感であったが態度に落ちつきが見られ服装は簡素であった。この子ども人格が支配的な時と、第3人格が支配的な時とでは、身体による表現のされ方および身体を通しての対人関係のもち方が極めて対照的であった。生育史から、本症例における子ども人格は、これまで意識に受け入れられなかった自己の部分が人格化して出現していたと理解される。彼女は自ら引き起こした盗癖のため学校への不適應が生じ、これまでの両親の期待にそった良い子では適應が困難になっていた。このような危機的状況において、これまで押さえ込んでいた本来の左利きの子どもの自分が顕在化し、身体を支配するようになったと言える。多重人格化することで、彼女の内面にあった同一性の問題は一旦棚上げされ病的な形ではあるが解消された。彼女は統一した自分を生きられなくなって発病したが、それまでは一つの身体のなかにかくつかの異なった自己を内包していたと言える。

6章 青年期と身体

さて子ども人格の彼女は、それまで順調であった月経もみられず、16才の女性としての成熟した身体の機能およびその感覚を失っていた。このことは小学1年から続いていた従兄からの性的外傷体験が大きな要因となっていた。それまで従兄に身体を捧げることで依存を満たしていたが、身体の成熟にともなう次第にそのような関係は葛藤をはらむものとなり、女性としての自分の身体を切り離して6才以前の子どもになることで、再びかつての幼時的依存の世界へと戻ったと考えられる。その際身体そのものが本来の機能を失って、それまで内包されていた分裂した自己に身体が支配されることになったといえる。ワロン¹¹⁾は「身体的感受性」を論じるなかで、リボー Ribot, T. の『人格的同一性の混乱は体感の突然の変化によって生じ、ある種の患者では、この同一性の混乱が昂じて、人格が多少とも分裂し、相対立した二つの人格になってしまうこともある』を引用し、体感（身体的感受性）がいかに人格と密接に関連したものであるかについて触れている。体感の喪失、体感の変化は、自己を内包する身体の機能に影響を与え、「内包する」ことに失敗したとき、異なった人格が身体を支配することになる。加えて、昨今多重人格と幼児虐待などの心的・身体的外傷体験との関連が強調されているが、このことは身体と人格の結びつきを考えさせるものである。

これまで青年期の身体について、症例を通して、かつ自己、身体、世界の関係の相において論じてきた。以下にまとめをかねて青年期の身体の特徴を要約する。

- (1) 身体は対人世界との関わりおよび自己の人格との関わりが強く、心と同一視されていることがある。
- (2) 青年期における性的同一性の獲得という発達上の課題は、身体的違和感（異形性）という形に集約され、その際身体は心の均衡を保つ働きを持つ。
- (3) 青年期に至るまでは自己に所属していることが自明な身体が、青年期において自己から遊離することでの自己との新たな関係性が、身体を通して再び模索される。
- (4) 身体感覚は自己の世界との関係における自己の立場や社会的状況を意味している。

- (5) 身体の感受性は人格と密接に関連し、身体は様々な分裂した自己（重要な人物たちとの同一化によって作られた様々な自己像）を内包する容器である。

おわりに

今回取り上げなかった青年期における病理像として、非行や犯罪及び手首自傷症候群などがある。たとえば手首自傷症候群は青年期に見られる特有の症候群であるが、彼らは自分の身体を傷つけることで、他者および自己に対して「傷ついた心」を表現する。また悪いイメージを手首に集約させて、その部分だけを切り落とそうとする試みとも読みとれる。そこでは身体を癒すことはすなわち心を癒すことにつながる。このように青年期において、身体は彼らの心や世界との関係を集約し、しかも象徴的に心の中のものを表現している。こころの病とは、自己と世界の関係の違和が、自己と身体の違和へと内化したことによるとすれば、青年期において「からだ」との和解は自分を受け入れることになる。そのことが次のライフステージである成人期を生きる自己へとつながる。

後記：本論分に紹介した症例は、著者らが実際に治療に携わったケースである。紹介に当たっては個人が特定できないように改変した。ただし、改変のために症例の意義は損なわれていないと考えている。

文 献

- 1) 尼ヶ崎彬：ことばと身体。勁草書房，東京，1990。
- 2) Ellenberger, H. S. : The Discovery of the Unconscious . Basic Books Inc., New York, 1970。(木村敏・中井久夫監訳：無意識の発見。弘文堂，東京)
- 3) 五味淵隆志：精神の病における心と体。「岩波講座 精神の科学 4。精神と身体」309—356，岩波書店，東京，1983。

6章 青年期と身体

- 4) Gorman, W. : Body image and the image of the brain. Warren H. Green, Inc. 1969。(村山久美子訳：ボディ・イメージ。誠信書房)
- 5) 笠原嘉：今日の青年期精神病理像。笠原嘉ら編「青年の精神病理1」3—27, 弘文堂, 東京, 1970。
- 6) 久保田競：心のしくみと脳の発達。朱鷺書房, 大阪, 1986。
- 7) 宮岡等, 阿部裕美：自己臭恐怖。臨床精神医学, 19(6); 877—881, 1990。
- 8) 村上靖彦：思春期妄想症について。笠原嘉ら編「青年の精神病理1」155—176, 弘文堂, 東京, 1976。
- 9) 鍋田恭孝：醜形恐怖症の臨床的研究。臨床精神医学, 19(6); 887—893, 1990。
- 10) 鑪幹八郎：アイデンティティの心理学。講談社現代新書, 東京, 1990。
- 11) ワロン：身体・自我・社会。(浜田寿美男訳編。ミネルヴァ書房, 1983)